

美術専攻 ヴィジュアルデザイン研究領域

オウ ユハン

王 愉帆



One day

紙、色鉛筆、ポスカ、デジタル出力、紙粘土

One day

日本の風土に見られる、日本独自の景観の考察と応用（例、地図、標識、電柱、等）をテーマに、卒業制作を行いました。

人は個人として、複雑な都市の中で、毎日を繰り返しながら生活しています。一方で、都市にある人工物は、いつも同じ場所に静かに立ち、人々の出会いや別れ、ささやかな感情の動き、そして日々繰り返される生活を見つめ続けています。素材や形への関心、人と都市との関係性についての考えが、この作品を制作するきっかけとなりました。

制作はグラフィック表現から始まり、そこから少しずつ、さまざまな表現方法を試していきました。例えば、スチロールや養生テープといった、都市の中でよく使われる資材を作品に取り入れたり、電線や金属の部品を紙粘土と組み合わせて立体作品の素材にしたり、日常生活にある人工物から形を取り出して文字を作ったりしています。過去 2 年間、日本独自の景観を考察し、それらを平面、タイポグラフィ、立体など、さまざまなデザイン分野へ応用する試みを行ってきました。

制作を進める中で、当たり前だと思われている身近な物でも、視点を変えて見てみると、その中にたくさんの可能性があると感じるようになりました。それぞれの可能性を一本の「道」にたとえると、その道同士が交差し、つながり合いながら、やがてひとつの「網」のようになって、未知の方向へと広がっていくように思えます。家の近くの電柱から始まった視点は、グラフィック表現、文字デザイン、素材の探求、立体表現、そして個人と都市との関係について考えるところまで、少しずつ広がっていきました。

作品制作を通して、ひとつの視点の奥には無数の可能性が隠れていると感じました。日常生活の中での観察や実感をデザイン作品に落とし込み、新たな視点を見出しながら、デザインのさらなる可能性を探っていきたいと考えています。自分にとって卒業制作は、「終わり」ではなく、「始まり」に近いものです。これからも、まだ見つけていない多くの「道」や「網」があると感じています。

そして、これらすべての始まりは、ある日、家の前にある電柱に目を向けたことでした。その日は、これまでの多くの日と同じように、ごく普通に、何気ない一日でした。